

令和 5 年 6 月 4 日現在

機関番号：23803

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2022

課題番号：19K12508

研究課題名（和文）韓国の知日派知識人をめぐるオーラルヒストリーを基礎とした学際的研究

研究課題名（英文）Interdisciplinary research based on oral histories of Japanese intellectuals in South Korea

研究代表者

小針 進（Susumu, Kohari）

静岡県立大学・国際関係学部・教授

研究者番号：40295548

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究はオーラルヒストリー・メソッドを主に用い、李御寧氏らを対象に体系的な「語り」を得て記録化し、韓国知日派知識人の社会観や文明観などを明らかにすることで、その学際的な検討と現代日韓関係の再照明を行うことを目的とした。韓国を代表する知識人となった李御寧氏自身の歩みと、それと重なる現代韓国の動向についての見方を中心に、語ってもらった。これまで一般には知られていない多くの韓国社会と日韓関係に関する知的な「語り」を得ることができた。それらは、日韓両国における、政府間の公式発表、メディアによる報道や言説だけではわからないことである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日韓間の水面下の協力関係や深い結びつき、両国の政治、経済の変動とは異なる次元で思考してきた知日派知識人の役割を提示することで、図式的な国際関係とは異なる次元での、戦後の日韓関係を再照明することができた。遺族の意向により、当分の間は記録が非公開だが、いずれ一般の刊行物として出版される予定である。そうすれば、日韓関係史、記号学、比較文学、哲学・思想、政治社会学、比較宗教学、比較文化論、文化政策論、外交史研究といった各分野において、学際的、学術的な貢献ができるだろう。

研究成果の概要（英文）：In this research, mainly using the oral history method, we obtained systematic narratives from Mr. Lee O Young and others, recorded them, and clarified the social and civilization views of Korean intellectuals who know Japan well. By doing so, we aimed to conduct an interdisciplinary examination and to relight contemporary Japan-Korea relations. We asked Mr. Lee O Young to talk about his own path to becoming an intellectual representing South Korea and his views on trends in contemporary South Korea that overlap with that. I was able to obtain many intellectual "narratives" about Korean society and Japan-Korea relations that were not generally known until now. These are things that cannot be understood only by official announcements between the governments of Japan and South Korea, media reports and discourses.

研究分野：地域研究（朝鮮半島）

キーワード：日韓関係 知日派 日本文化論 韓国文化 オーラルヒストリー 李御寧 韓国社会 縮み志向

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究は、次の3つの科研費による過去のプロジェクトを継承し、発展させるものとして開始した。「口述記録と文書記録を基礎とした現代日韓関係史研究の再構築」(科学研究費補助金「基盤研究(C)」2006~2007年度、研究代表者:佐道明広、連携研究者:小針進)「オーラルヒストリーを基礎とした日韓関係史の再構築に向けた学際的研究」(科学研究費補助金「基盤研究(B)」2010~2012年度、研究代表者:小針進)「オーラルヒストリーによる戦後日韓関係の再照明」(科学研究費補助金「基盤研究(C)」2014~2017年度、研究代表者:小針進)

(2) これらのプロジェクトでは、地域研究(朝鮮半島)日本政治外交(史)研究、国際関係研究といった社会科学系の研究者を中心に、韓国の研究者の協力も得て、包括的な視点での資料収集を行い、オーラル・メソッドを用いて日韓関係に関する基礎的資料の収集を行うことを重要な課題としてきた。そのため、対象者は金泳三元大統領、張聖萬元国会副議長、権五琦元副総理、崔相龍元駐日大使など、日韓両国間の政治に関わった人々を中心であった。記録の報告書も発行した。

(3) 2014~2017年度では康仁徳元統一部長官、崔書勉国際韓国研究院長など、政治だけでなく、両国の学界にかかわった要人を対象として順調に実施したものの、オーラルヒストリーとしての記録化が、期間内では未完結であった。2018~2019年には、静岡県立大学の研究費で報告書発行までにはこぎつけたものの、出版物としての刊行も急がれる状態であった。

(4) 政治とは距離を置く知日派の知識人、いわゆる文化人と言われる人々へのオーラルヒストリーの必要性が、それまでの社会科学系ではなく、哲学、思想史、歴史といった人文科学分野の研究者からも聞かれるようになっていた。韓国には、日本の学問に接して、日本文化に精通し、日本語が達者な知日派知識人が存在し、現代韓国の文化や思想へ一定の影響を与えてきたからである。「反日」イメージがある国のいっぽうで、韓国は他のどの外国よりも、知日派知識人の層が厚かったからでもある。

2. 研究の目的

(1) 戦後の日韓関係を知る識者が次々に一線を退いているなか、日韓関係に関与した韓国の識者を対象とするオーラルヒストリー・プロジェクトを、上記1で示したこれまでの研究を継承する形で実施した。今回は、政治とは距離を置く、知日派知識人の歩みや思考をオーラルヒストリー・メソッドによって記録し、これまで語り継がれてこなかった日韓間の水面下の協力関係や深い結びつきを探った。特に、知日派知識人は、両国の政治、経済の変動とは異なる次元で、日本と韓国の文化を柔軟にとらえる傾向があると仮定し、その歩みを知ることそのものを、今日的の意義としてとらえることを目的とした。これは、戦後の日韓関係を再照明する意味からも、必要な証言の記録であり、学際的にも今日的な意義を持つ。

(2) 本研究で、知日派知識人の代表として対象としたのは、初代文化部長官の李御寧氏(1933年生まれ)である。李御寧氏を選んだ理由は、次のような点からであった。韓国を代表する著名な知識人である、記号学の業績が多彩な学者(梨花女子大名誉教授)というだけでなく、文化批評家として大衆的にも知られている(大手新聞社の論説委員などを歴任)、扇子、盆栽、生け花、弁当、トランジスタなど日常生活の事象から、日本文化には小さいものに美を認め、あらゆるものを「縮める」ところに特徴があると論じた著書『「縮み」志向の日本人』(学生社:1982年、講談社学術文庫:2007年)がロングセラー(国際交流基金大賞受賞)になるなど、日本社会でも知られた知識人である(東京大学比較文学比較文化研究室客員研究員、国際日本文化研究センター客員教授も歴任)、アナログ的な伝統文化だけでなく、韓国のIT化を主導するなどデジタル的な現代文化へも造詣が深い、盧泰愚政権下で文化部長官(初代)、金大中政権下で新千年準備委員会(大統領直属機関)委員長に任命されるなど、韓国政府の歴代文化政策にも影響を及ぼしてきた、日中韓賢人会議を構想し、実現させるなど、東アジアの地域安定のために知的貢献をしてきた。李御寧氏に対して数回に分けて体系的な「語り」を得て記録化し、韓国知日派知識人の社会観や文明観などを明らかにすることで、その学際的な検討と現代日韓関係の再照明を行うことを目的のひとつとした。

(3) 知日派知識人といっても、生まれた年が1930年代までの者と1940年代以降の者とは、背景が異なる。前者の場合は日本統治下の朝鮮で日本の教育を受けた経験がある者であり、後者はそうした経験はないものの、韓国社会が日本の学問から強い影響を受けるなかで知的な形成を育んだ者である。李御寧氏は前者であり、こうした知識人が次々に一線を退いており、鬼籍入りもしている現実がある。しかも、21世の韓国社会では、かつてのような日本の圧倒的な重要性が減退しており、日本への留学生が減少するなど、もはや日本を知る知識人の層は厚いとはい

えない状況のなかでは、こうした知日派知識人の「語り」は貴重であり、早期の「語り」を引き出す必要がある。李御寧氏は、本研究プロジェクトの期間中である 2022 年 2 月に逝去された。

(4)ただ単にインタビューを行うのではなく、オーラルヒストリーを受けて、その精度の高い記録化を行う。記録化は段階的に行うが、最終的に報告書として刊行すること自体が本研究の目的でもある。このため、李御寧氏の記録化作業だけでなく、これまでの研究プロジェクトで得た「語り」のうち、康仁徳氏と崔書勉氏の報告書を単行本として出版化するための記録化作業も同時並行して行うこととした。なお、崔書勉氏も本研究プロジェクトの期間中である 2020 年 5 月に逝去された。

3. 研究の方法

(1)オーラルヒストリー・メソッドは数カ月に 1 度のペースで行う研究方法である。対象者(話者)が韓国にいるため、研究グループ(研究代表者 1 名、研究分担者 2 名、研究協力者 1 名)と対象者の時間が合致する日程を、研究初年度である 2019 年 8 月、9 月、11~12 月と 3 回に分けて韓国ソウルへ出張し、計 8 回分のオーラルヒストリーを実施した。1 日に行う時間は 5~7 時間に及び、1 度の出張で 2 日間または 3 日間の連続で行った。

(2)学際的な研究であるため、研究グループは、比較文学・文化学、哲学・思想、政治社会学、比較宗教文化といった、異なる領域を専門とする者から構成した。

(3)録音した音声記録は適正な保存をしながら、反訳(録音起こし)の工程に移った。質の高い反訳の作成は、技術的に高度であるだけでなく、守秘義務を厳守する信頼性の高い業者に第一段階として依頼した。この作業を 2019 年度から 2020 年度にかけて行い、「録音起こし」原稿は、メンバーによるファクトと用語の最低限の第 1 次チェックを、2020 年度前半に行った。さらなる記録化作業として、2020 年後半からは話者によるからの校閲を受ける予定であったが、新型コロナウイルスの感染拡大のため、海外出張ができない状況となった。

(4)2021 年度は代表者と分担者による第 2 次チェックと確認作業を、リモートと郵送により実施したものの、予定していた話者や話者と関係する現地協力者と接触しながらの校閲作業と追加的な聞き取りに関しては、先送りする結果となった。さらに、話者は療養と闘病生活に入り、年度末となる 2022 年 2 月に逝去された。

(5)2022 年度は、代表者を中心に第 3 次チェック作業を本格化し、報告書発行のための作業を行った。話者が逝去されたため、追加インタビューは断念したが、遺族や関係者による校閲と、報告書発行の了承を、現地(ソウル)へのお出張と郵送によって行った。

(6)その一方で、2018 年に報告書発行を完了させた崔書勉氏の記録を一般の単行本として出版するための調査と出版作業を、2020 年度から 2021 年度にかけて実施した。

4. 研究成果

(1)李御寧氏の文化部長官としての在任期間は、1990 年 1 月から 91 年 12 月までであり、その職務について語って頂いたのはもちろん、1993 年の出生からの出来事、植民地時代と重なった学齢期に経験した「日本」体験、ソウル大在学中からの文芸評論活動、主要紙の論説委員や批評家としての執筆活動、梨花女子大教授としての研究・教育活動など、韓国を代表する知識人となった自身の歩みと、それと重なる韓国社会や文化についての見方を中心に、これまで一般には知られていない多くの「語り」を得ることができた。

(2)日本では『「縮み」志向の日本人』(1982 年)の著者として李御寧氏は有名である。ベストセラーとなった同書は、「一般的な日本人論の類書はいまだに欧米一辺倒の立場やその比較によってしか書かれていないのです」という問題意識によって書かれた。同書が世に出た経緯も多く語ってもらった。在外研究の場所として滞留した東京大や国際日本文化研究センター(日文研)での話、ソウル五輪(1988 年)の総合プロデューサーとして、開会式の演出などを担当された話からは、知日派知識人として歩みを特に理解できる部分が多数あった。

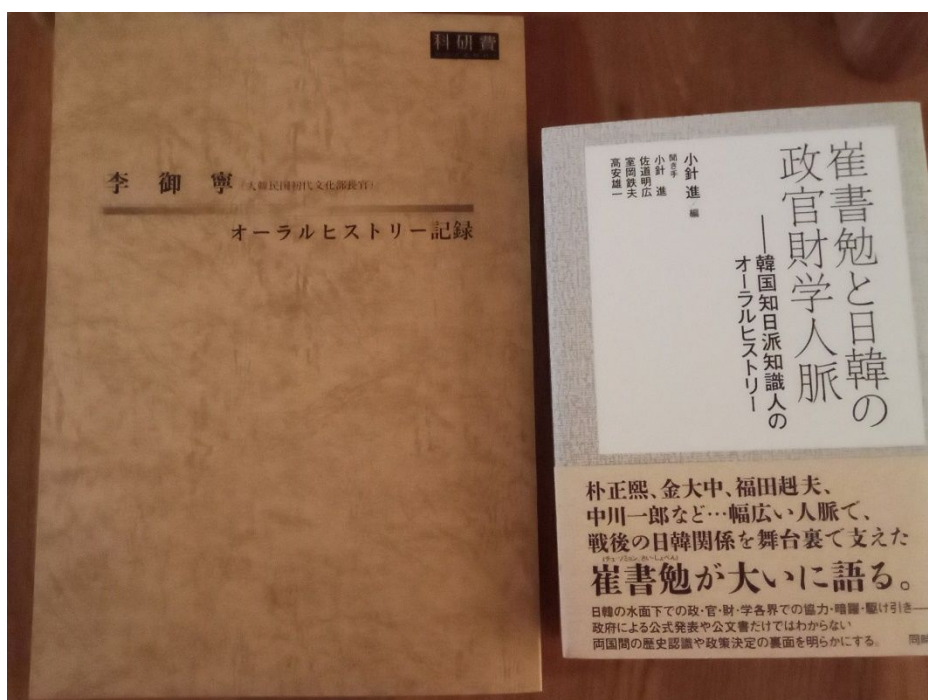
(3)李御寧氏の「語り」からは、全体として、次のようなことを明らかにすることができた。政府間の公式発表、両国メディアによる報道や言説だけでは、日韓関係史を語るのには不十分である。公的言語や書き言葉だけでなく、韓国人(とくに「日本語世代」)の、日本や日本人についての指摘言語と話し言葉を聞くことは重要である。同氏が語る盧泰愚、金大中、朴槿恵といった歴代大統領、李健熙(サムスン電子会長)などの財界人、梅原猛(国際日本文化研究センター名誉教授)、芳賀徹(東大名誉教授)などの日本の文化人、中曽根康弘や朴泰俊といった日韓両国の有力政治家(日韓議員連盟・韓日議員連盟の会合で多数講演)などとの関係から、日韓間

には図式的な国際関係とは異なる、多元的な人間関係が存在してきた。日本統治下で教育を受けたことがある知識人ゆえなのか、李御寧氏だけの特徴なのか、ハンゲル世代のように日本への不合理な対抗意識や「勇ましい語り」はなく、両国の政治、経済の変動とは無関係に、日韓両国の社会の動きを合理的に説明しえる立場と矜持を強く有している。ひとりの知日派知識人の文章や言葉が、きわめて多分野において、異なる国籍の人びとの心を動かしてきた背景には、日本と韓国の文化を柔軟にとらえる能力を有しているゆえからではないかという推測が可能である。

(4) 2023年3月には、李御寧氏のオーラルヒストリー記録の報告書を発行できた(【写真】左を参照)。遺族の意向により、当分の間は一般には非公開であるが、いずれ、一般の刊行物として出版されることになる。そうすれば、日韓関係史、記号学、比較文学、哲学・思想、政治社会学、比較宗教学、比較文化論、文化政策論、外交史研究といった学際的な分野において、学術的な貢献ができるだろう。

(5) 2018年3月に報告書として発刊した崔書勉氏のオーラルヒストリー記録は、2022年2月に『崔書勉と日韓の政官財学人脈：韓国知日派知識人のオーラルヒストリー』(同時代社)として出版できた(【写真】右を参照)。日韓関係史、日本政治史、外交史研究にとって、貴重な証言記録となった。

【写真】



5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計5件

1. 著者名 小針 進、佐道 明広、室岡 鉄夫、高安 雄一	4. 発行年 2022年
2. 出版社 同時代社	5. 総ページ数 600
3. 書名 崔書勉と日韓の政官財学人脈	
1. 著者名 小針進	4. 発行年 2021年
2. 出版社 柘植書房新社	5. 総ページ数 336
3. 書名 文在寅政権期の韓国社会・政治と日韓関係	
1. 著者名 小倉 紀蔵	4. 発行年 2020年
2. 出版社 P H P 研究所	5. 総ページ数 254
3. 書名 群島の文明と大陸の文明	
1. 著者名 小針進・室岡鉄夫・佐道明広・高安雄一	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Nanam Publishing House	5. 総ページ数 452
3. 書名 韓日関係水面下60年崔書勉に聞く1 (韓国語)	

1. 著者名 小針進・室岡鉄夫・佐道明広・高安雄一	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Nanam Publishing House	5. 総ページ数 562
3. 書名 韓日関係水面下60年崔書勉に聞く2 (韓国語)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	濱田 陽 (Hamada Yo) (70389857)	帝京大学・文学部・教授 (32643)	
研究分担者	小倉 紀蔵 (Ogura Kizo) (80287036)	京都大学・人間・環境学研究科・教授 (14301)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	上垣外 憲一 (Kamigaito Kenichi)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------